

ホルスタイン種子牛に発生した口腔内の血管腫摘出の一症例

阪神基幹家畜診療所

○上田茂樹 笹倉春美 鎌田 立 泉 弘樹
濱崎健太 宇都岳彦 坂田 学 荻野好彦

今回、ホルスタイン種子牛の口腔内に発生した腫瘤を画像診断し、その病勢を確定、摘出手術を実施した。摘出した腫瘤は、病理組織学検査の結果、毛細血管腫と診断された。

牛の口腔内腫瘍は、エナメル上皮腫や歯牙腫などの歯原性腫瘍と線維腫や血管腫、および黒色腫などの非歯原性腫瘍に分類される。血管腫は血管内上皮細胞に由来する良性の腫瘍であり、海綿状血管腫と毛細血管腫に分けられ、先天性と後天性のものがある。血管腫は牛の口腔内や皮膚に発生するが、その報告は少ない。

材料および方法

症例はホルスタイン種、雌、2015年2月25日出生、発育正常。5月8日に下顎の腫脹と採食時の出血を主訴とし、下顎の切歯歯肉部に6×3cm大の腫瘤を確認した。

5月20日にX線検査と超音波画像検査を実施。6月2日に腫瘤の摘出を行なった。X線診断装置は、携帯型X線撮影装置IPF-21（アールテック株式会社 横浜）、超音波画像検査はトリンガVリニア（イザオテ・ヨーロッパ社 オランダ）を用いた。摘出手術は2%キシラジン注（フジタ製薬株式会社 東京）鎮静下で型どおり行なった。摘出した腫瘤は病理組織学検査を実施した。

結果

腫瘤は赤桃色で、一部に出血を認め、切歯を圧迫し、歯列を乱していた。腫瘤が切歯を巻き込んでいたため、切歯の一部を含め、全摘出を行なった。

X線検査では、腫瘤は下顎に限局しており、均一な透過性を示していた。超音波画像検査では、エコーレベルの均一な像を示し、膿様物の貯留は認めなかった。

現在まで再発はなく、順調な発育を認めた。

病理組織学検査では、血管内皮細胞に由来する細胞が管腔を形成しながら増殖し、管腔内には赤血球が散見された。管腔構造を形成する細胞の形態が均一であり管腔構造が毛細血管様構造を呈していたことから、腫瘤は良性の毛細血管腫と診断した。

まとめ

今回、血管腫が先天性か後天性かは不明であった。摘出前のX線検査や超音波画像検査により病変が切歯部に限局しており、歯牙腫でみられるエナメル形成や石灰化を認めず、膿瘍でないことも確認できた。画像診断を用いることで病勢が確定でき、的確な摘出手術が行なえた。画像診断の優位性を示す症例であった。